様式第5号（第9条関係）

論 文 内 容 の 要 旨

報告番号		氏　名	棚瀬　康仁
Factors that Differentiate between Endometriosis-associated Ovarian Cancer and Benign Ovarian Endometriosis with Mural Nodules. （ 和　訳 ）子宮内膜症関連卵巣癌と隆起性病変を有する良性卵巣内膜症を鑑別する因子の検討			

論文内容の要旨

卵巣嚢胞壁の隆起性病変とその乳頭状増生は、卵巣子宮内膜症の悪性化（子宮内膜症関連卵巣癌）を示唆する所見であるが、時折良性の卵巣子宮内膜症においても認められるため、良悪性の鑑別に難渋することがある。そこで、隆起性病変を有する卵巣子宮内膜症と子宮内膜症関連卵巣癌との鑑別診断に役立つ術前画像診断の特徴を明らかにすることを目的として以下の検討を行った。

2008 年から 2015 年の 7 年間に当科で治療し病理学的に診断を得た、隆起性病変を有する卵巣子宮内膜症 42 例（OE 群）と子宮内膜症関連卵巣癌 40 例(EAOC 群)を後方視的に抽出した。全ての症例は術前に骨盤 MRI 検査で評価され、その画像的特徴、臨床的背景および病理診断について、2 群間で比較検討した。術前画像の評価項目としては、嚢胞径、隆起性病変の大きさ、嚢胞部分の信号強度、隆起性病変の位置、Shading の有無などの評価を行った。隆起性病変の大きさとして、嚢胞底部から隆起性病変頂部までの最大長を Height、Height に直交する隆起性病変の最大長を Width として、それぞれの長さを測定し、Height/Width 比(HWR)の評価も行った。

OE 群の大部分(78%)が沈殿した血塊であった。EAOC 群は OE 群と比して有意に高齢で、嚢胞径、隆起性病変の大きさ(Height、Width)おいて有意に高値を呈した。HWR も EAOC 群で有意に高値を呈し、EAOC 群の隆起性病変は OE 群よりも大きく縦長であることを示唆する結果であった。嚢胞の信号強度の検討では、OE 群の 90%が T1 強調像で高信号を呈し、その 64%に shading を認め、OE 群の大部分が所謂チョコレート嚢胞の性状を呈していた。一方 EAOC 群の T1 強調像は様々な信号を呈し、T2 強調像では 93%が高信号を呈し、shading は 14%にしか認めなかった。その頻度において統計学的に有意差を認め、OE 群と EAOC 群での嚢胞性状の違いを示唆する結果と考えられた。また、隆起性病変が嚢胞内のどの部位に付着するかを検討したところ、OE 群の隆起性病変の 90%が後壁側付着であったのに対し、EAOC 群では 62.5%が前壁付着であり、統計学的に有意差を認めた。さらに、多変量解析によって、Height(>1.5cm)、HWR(>0.9)、嚢胞径(>7.9cm)、年齢(>43 歳)が OE 群と EAOC 群を鑑別する独立因子として抽出された。

これまで隆起性病変の大きさに着目した報告は稀少であり、中でも Heigth や Width という観点から隆起性病変の大きさを評価した報告は無い。さらに HWR を用いることで、隆起性病変の形態的な評価が実現し、この HWR が両群を鑑別する因子として抽出されたことは新しい知見である。今回の検討はあくまで隆起性病変の形態が EAOC の鑑別に寄与するかどうかを検討したため、造影剤による濃染の有無や拡散強調像による評価は検討項目から除外した。経腟超音波検査での形態的評価が主体となる日常診療において、今回の結果はすぐにでも役立てることが可能であり、MRI を行うかどうかの重要な判断材料になると考えられた。また、若年症例やアレルギー既往など造影剤の使用が憚られる症例において、隆起性病変の形態的評価を加味する事で、良悪性の鑑別診断の一助になることも期待できる。今回の検討結果は極めて有意義で新しい知見であると考えられた。